

## 法事・仏事といふこと

どんなことでも実際自分の身に降りかかるとき、初めて真剣に取り組めるものだということが、わたし今までつくづく思い知らされました。

定年退職のこの年になるまでは、何でも彼でも親任せ。殊に家庭のこと村付き合いのことになると皆無知無関心で過ごしてきました。その瞼を齧ってきた父親が6年前に死んでサテその親父の七回忌の法事が巡つて来るのでした。

1周忌や三回忌の時は、憤ただしく夢の中、いつとはなしに済んでしまいましたが、今度はそうは言つておれません。この家の跡もちとして世間様にも恥じないよう勧めなければなりません。本棚にあった『仏事の常識』と言う本を一夜漬けで学習したのですが、どうも一般的といふ抽象的といふのか、こらあたりの風習とは大分違うように思えます。

お寺さんへ行つて聞いて見て、仏事法事に関する今までのイメージが一大転換。聞いて見てよかつた、とても助かった気持ちです。わしらがどれだけ善根積んで親のため仏のために供養しようとも、それで祖先が浮かばれるという保証はどこにもない。それどころ

か、これだけ供養してやつているのになんの功徳も御利益もないなどと仏を逆恨みするの声によつてその他いろいろなものによつてしまつらわれているが、如来様はそれいろいろなしつらえによつて衆生済度のお仕事をなさる。それが仏事、ほとけさまのお仕事。そのほとけさまのお仕事に出会わせてもらうこと、これが法事仏事ということじゃと『淨土論註』というお書物に書いてある。

親の年忌じや言うて大勢寄つて飲み食いするのは、あれは仏事じやーのうて「食事」。

法事仏事というのは、たとえば親の命日をご縁にして、いつでもどこでも、このわたしに「必ず救う」とはたらいでくださる如来様のお働きに出会わさせて戴く、気づかせていたく、これが仏教でいう仏事・法事というもんじや。

年末、なんとなく心せわしい季節がやって参りました。  
前回紹介致しましたわが家の裏の藤棚にも、枝が折れるほどの雪が積もっております。

しかしく見ると、その隣に植えた梅ノ木の蕾が、心なしか今ははじけそうな小さなピンクをのぞかせて春を待っています。

この季節、いつでも思うことです。が、この暗く重たい雪の下の冬をどうしたら過ごせるのかと思います。が、いえいえこの先には手足伸ばしてなんでも出来る春があるので、自分を納得させ生きております。

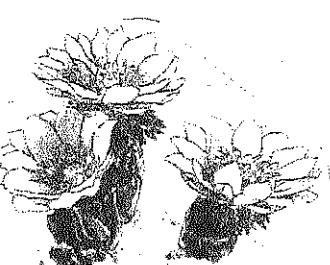
私は、今度教えてもらったこのことだけでも、みなさんともどもおさえさせていただこう。そんな法事をおつとめしたいと決意してといふところであります。

（放送原稿を書き書きといわれますので正直な所を書きました）

昨年までは、こんな私を支えていた大いに仏堂会長を務めさせていた大いしたこと、ここから感謝申し上げます。ありがとうございます。

輝かしい伝統ある勝林寺仏堂。暖かなころを寄せ合つて活動している私たちのこの仏堂のますますの躍進を、皆様とともに祈念致します。

## 葬儀



十二月二十四日  
中嶋 英夫 様

坪口 哲也  
八十歳

## 道俗時衆共同心

## 勝林寺住職 西池 美幸

## 庄紹和

坊守 西池 美幸  
前住職 西池 美幸

西池 美幸

責任役員 門徒総代  
田中 大石 玉井 宮嶋 千秋 横山 弘三

西池 深音 西池 希里

西池 哲也  
門徒総代 田中 大石 玉井 宮嶋 千秋 横山 弘三

西池 哲也

西池 哲也  
門徒総代 田中 大石 玉井 宮嶋 千秋 横山 弘三

西池 哲也

西池 哲也  
門徒総代 田中 大石 玉井 宮嶋 千秋 横山 弘三

西池 哲也

西池 哲也  
門徒総代 田中 大石 玉井 宮嶋 千秋 横山 弘三

西池 哲也

西池 哲也  
門徒総代 田中 大石 玉井 宮嶋 千秋 横山 弘三

西池 哲也

西池 哲也  
門徒総代 田中 大石 玉井 宮嶋 千秋 横山 弘三

西池 哲也

西池 哲也  
門徒総代 田中 大石 玉井 宮嶋 千秋 横山 弘三

西池 哲也

西池 哲也  
門徒総代 田中 大石 玉井 宮嶋 千秋 横山 弘三

西池 哲也

西池 哲也  
門徒総代 田中 大石 玉井 宮嶋 千秋 横山 弘三

西池 哲也

西池 哲也  
門徒総代 田中 大石 玉井 宮嶋 千秋 横山 弘三

西池 哲也

西池 哲也  
門徒総代 田中 大石 玉井 宮嶋 千秋 横山 弘三

西池 哲也

西池 哲也  
門徒総代 田中 大石 玉井 宮嶋 千秋 横山 弘三

西池 哲也

西池 哲也  
門徒総代 田中 大石 玉井 宮嶋 千秋 横山 弘三

西池 哲也

西池 哲也  
門徒総代 田中 大石 玉井 宮嶋 千秋 横山 弘三

西池 哲也

西池 哲也  
門徒総代 田中 大石 玉井 宮嶋 千秋 横山 弘三

西池 哲也

西池 哲也  
門徒総代 田中 大石 玉井 宮嶋 千秋 横山 弘三

西池 哲也

西池 哲也  
門徒総代 田中 大石 玉井 宮嶋 千秋 横山 弘三

西池 哲也

西池 哲也  
門徒総代 田中 大石 玉井 宮嶋 千秋 横山 弘三

西池 哲也

西池 哲也  
門徒総代 田中 大石 玉井 宮嶋 千秋 横山 弘三

西池 哲也

西池 哲也  
門徒総代 田中 大石 玉井 宮嶋 千秋 横山 弘三

西池 哲也

西池 哲也  
門徒総代 田中 大石 玉井 宮嶋 千秋 横山 弘三

西池 哲也

西池 哲也  
門徒総代 田中 大石 玉井 宮嶋 千秋 横山 弘三

西池 哲也



## 成人式おめでとう



永井坂本湯口岡野出石上森藤斎数

理恵亮純子宏美紗太康博真希

（矢根）（上村）（栗尾）（上小田）（正法寺）（上小田）

高校一年男子

僕のうちにには八十歳過ぎた頑固じいちゃんがいます。頑固といつても人から迷惑がられるような頑固ではありません。

その頑固の第一は、一年中早起き。自分で仕事を受け持つて人が起きる前にさっさと掃除やら家事までこなしてしまいます。これは少しばかり家人の人から迷惑がられる点ですが、みんなだまって黙認しています。

その他にもチヨイチヨイ滑稽に思える頑固さはあります。次の一回は頑固というよりも「堂々たる年よりの主張」というか、僕には「人生の大先輩の貴様」とも「祖先さまの教訓」とも思えるので紹介して見ようと思います。

それは人の年齢の考え方における問題です。

「わしの生まれば1925年大正十四年一月一日でありますから八十一歳であります」とおじいちゃんは申します。

本当は満八十歳なのに、一歳ばかり鯖を読むのです。

「バカ、鯖を読んでるんじゃない。昔はみな数え年と言うて、おかあちゃんのおなかに宿ったときから数えたんじゃ。それが本当に命の数え方なんじゃ」

「この世に生まれたときから数える満年齢なんてのは、そもそも差別の根源もいいところじゃ」

「いつ生まれた。どこの家に生まれた。ここぞこの村に生まれた。どこの国に生まれた。どんな身体つきで生まれた。どれくらいの知能で生まれた…。そこから血筋・家柄へのこだわりも、部落・民族の差別も、障害者差別も芽生えて来るじゃあないか。」

「命が、おかあちゃんのおなかに宿ってからしばらくの間は、ママーと一緒に、鰐呼吸をするお魚と同じ、お猿さんやなんかとも

同じいのちを経過してきたのじや。他のいきものの命と同じいのちから出発したのじや。みんなひとつ兄弟のいのちから出発したんだ。そのところを大事に思わんともつたいないんや」

これが頑固じいちゃんの主張です。なかなか説得力があります。

「年が寄つたらなーだんだん元のいのちに帰るのやローカ。このごろ野や山を歩いとつても、山の木も道端の花も犬も猫もそれから見えるのじや。とつくに死んだおかあちゃんにも会えるし。なにか大きな大きいのちのはたらきのなかに一緒に今生かされている、そんな喜びがゾクゾクと湧いてきて、生きていてよかったです。年が寄つてよかったです、そんな喜びの中の一日一日をいただいてるのじや」

ここまで来ると僕は脱帽最敬礼。数え年にこだわる頑固じいさんが仙人みたいに思えたりします。

月です。しかし役場への届けはウシ年の正月です。ほやさい時に「道理でチヨマチヨマと小回りきてせわしおすなー」と言われたり、ときには、「やっぱりさすが牛年、どうしりと落ち着いておられますなー」なんて。エトで占つてもらつてわたしほんまにウロウロしますがな。

それからちよつと賢こぶつた歳の呼び方ですが、喜寿（きじゅ）とか傘寿（さんじゅ）とか卒寿（そつじゅ）とか白寿（はくじゅ）。これもまあ、数字あわせゴロあわせもええとこです。何のいみも意義もない数え方です。

ちょっと意味のありそうなのは、ホレあの論語。孔子さまの「いのちの節目節目」を押さえた云い方。

志学（十五歳になつたらよし学ぼうというファイトが出なくちゃー）。而立（自分の足で立ちなさい）。不惑（四十になつてウロウロ惑つているようじやーねー）。知命（五十になつたらわが行く道が見えてくる）。耳順（六十になつても我を張つてばかりで人の言い分を聞けないようでは）。ところがこの云い方も、「心、欲するところに従つて矩を踰（こ）えず。」七十歳どまりです。孔子さまの時代では、これが人生の究極、老いの極まりだったのでしょうか、今は七十、鼻たれ小僧。

先ず第一、せつかくのいのちを、なんやらゴロ合わせみたいなチャラケた呼び方するのはどうかと思います。

十ニ十二支というのかエトというのか、

「ネズミ年、ヘビ年」というあれです。

「あんたへビ年やつたん。道理であんた執念ぶかいいなー」なんて。

わたしは本当の生まれば、ネズミ年の十二月です。ほやさい時には「道理でチヨマチヨマと小回りきてせわしおすなー」と言われたり、ときには、「やっぱりさすが牛年、どうしりと落ち着いておられますなー」なんて。エトで占つてもらつてわたしほんまにウロウロしますがな。

## 一月のことよみ

一日 修正会（しゅしょうえ）

二→三日 初参り

四日 但東町初参り  
五日 宗学院別科  
九日 成人の日

十日 坪口女中講

十一日 坪口報恩講

十二日 和屋報恩講

十三日 檻見報恩講

十四日 檻見報恩講

十五日 檻見報恩講

十六日 出石A地区報恩講

十七日 出石D地区報恩講

十八日 出石B地区報恩講

十九日 出石C地区報恩講

二十日 榻見報恩講

二十一日 代議員会

二十二日 朗読ボランティアあすなろ

二十三日 別科

二十四日 別科

二十五日 別科

二十六日 別科

二十七日 別科

二十八日 別科

二十九日 別科

三十日 別科

三十一日 別科

三十二日 別科

三十三日 別科

三十四日 別科

三十五日 別科

三十六日 別科

三十七日 別科

三十八日 別科

三十九日 別科

四十日 別科

四十一日 別科

四十二日 別科

四十三日 別科



## いのちの数え方

お正月のごあいさつのついでに、いつでも話題にのぼるのが

「なんの歳になつた？」

そのことにつけても思うことは、日本人の歳の数え方にはいろいろあるのだなーと言うことです。

「こんな歳になりました」

そのことにつけても思うことは、日本人の歳の数え方にはいろいろあるのだなーと言

うことです。

そこで九十歳まで長命の親鸞さまに尋ねてみました。

十九歳のとき聖徳太子の夢のお告げで「いま今日しかない命をどう生きるか」を問い合わせられて以来、一日一日一年一年を真剣に生

きて来たその親鸞さま。無量寿というおおきな如來さまのいのちのなかに生きる刻々のいのちを実感しながら感謝しながら、いただいた年齢をすべての著書に書きとめておられるのです。

無量寿のなかにいただいた今日の命を、数え数えて大切に生きたいものだとおもいます。

わたしもやがて数えて八十二歳になります。今年も、ほとけのいのちのなかに、一日一刻を、大切に生きたいと思います。